

4 沖縄母性看護研究会

申請者氏名（代表者） 仲村 美津枝		所属部門	人間健康学部看護学科 母性看護学領域		
企画名 沖縄母性看護研究会：第2回 妊産婦の腰痛予防 講師：神田 佳代（理学療法士）					
企画の目的・概要（企画の目的と概要を正確かつ簡潔に説明して下さい。）					
企画の目的 妊産褥婦にかかわる助産師、保健師、看護師や専門職者が母性看護に関連するテーマでディスカッションを行い、助産ケアの質の向上に貢献できる。妊婦の腰痛を理学療法士からの専門的な知識から学ぶことは、ケアにかかわるコメディカルの知識の洞察や意識づけに関与し、助産ケアに還元することを目的とする。					
概要 マイナートラブルの一つでもある腰痛は、正しい姿勢を保持することと運動を実施することが有効である。今回は妊産婦の腰痛について、発症率、腰痛部位、疼痛の程度、発症時期の報告と妊婦に実践し効果のあった運動を理解することで、腰痛予防方法を考えていく。 正しい姿勢を専門職者自身が体感することで、今後の指導に役立てていく。					
企画実施組織（代表者、分担者及び協力者） 仲村 美津枝					
氏名	所属・職名	現在の専門	役割分担	備考	
仲村美津枝	人間健康学部 教授	母性看護領域	司会 進行	協力者	
鶴巻 陽子	人間健康学部 助教	母性看護領域	会場設営・受付		
長嶺絵里子	当大学大学院 修士課程在学中	母性看護	受付		
企画実施報告（参加人数等を明記）					
実施した日時：平成25年6月22日（木）18:30～20:30 ・参加人数は12名。 内訳は助産師5名、保健師2名、理学療法士2名、看護教員1名、（他2名はアンケート無記入のため、詳細不明） ・北部地区より6名、中部地区より2名、南部地区より2名（他2名は詳細不明）					
企画の実施評価（ケアの質の向上、または大学および地域の貢献）					
・保健婦からは妊婦の腰痛は腹部が突出するために生理的なものと考えていたが、予防ができる、非妊時の姿勢の大切さが実感できたとの感想があった。また専門的な話が聞けて良かったなどの意見があったことから母子保健の一端をになう保健師が参加し、学びを得たことは、地域で保健指導を行う立場としてより産婦に寄り添う指導ができるのではないかと考える。助産師からは、今までの指導方法にさらに今回学んだことを紹介していきたいとより実践的な取り組みをするきっかけになれたのではないかと考える。さらに理学的なアプローチは大切だと考えていたが、具体的な指導方法を示されたことで身体をよく知り、見て、働きかけることの大切さを学んだとの看護教員の感想があり、学生への妊婦の保健指導に今後役立てることができれば今回の研究会がケアの質の向上に貢献できると考える					
今後の取組み（本企画について、今後どのように発展するかを具体的に記入してください。）					
・今後は、母児のテーマで企画をしてほしい、添い寝の指導、産後鬱、マタニティブルーについて、妊婦の動作法について、妊婦の特徴についての研修会を開催してほしいとの要望があり、コメディカルの知識の共有の必要性を実感した。今後は理解度や情報量の異なる分野ではあるが、母性看護に関連したテーマで情報を発信できるように企画していく予定である。					

第3回

申請者氏名（代表者） 小西清美		所属部門	人間健康学部看護学科 母性看護学領域	
企画名 沖縄母性看護研究会：第3回私の行う新生児訪問指導 講師：田中 典子				
企画の目的・概要（企画の目的と概要を正確かつ簡潔に説明して下さい。） <p>企画の目的としては、妊産褥婦にかかわる助産師、保健師、看護師や専門職者が母性看護に関連するテーマでディスカッションを行い、情報交換の場とする。さらにケアに関わるコメディカルの知識の洞察、意識づけに関与し、助産ケアに還元すること。</p> <p>概要としては、母子保健担当の市役所の保健師より、保健師の活動内容（新生児、乳児の家庭訪問、健康相談、子育て支援センター、ファミリーサポートセンター、小児デイケア）について、さらに家庭訪問の様子についてはロールプレイを実施した。名護市の問題として、若年妊娠の割合が高いことがあげられる。訪問対象者の把握をするための工夫や各地域での取り組みについて参加者との意見の交換が行われた。</p>				
企画実施組織（代表者、分担者及び協力者） (小西 清美 鶴巻 陽子)				
氏名	所属・職名	現在の専門	役割分担	備考
小西 清美 鶴巻 陽子	人間健康学部教授 人間健康学部助教	母性看護領域 //	司会・進行 会場設営 資料準備	韓国ソウルWANS学会出張で欠席
金城 壽子	人間健康学部准教授	//		
企画実施報告(参加人数等を明記)				
実施した日時：平成25年10月17（木）18:30～20:30 ・参加人数 11名 内訳 看護学生 5名 大学院生1名 市役所職員 4名 他1名				
企画の実施評価(ケアの質の向上、または大学および地域の貢献)				
<p>・具体的な保健師の活動内容がロールプレイを通してと講義資料などから理解する事が出来た。実習を終了している学生からは、周りの母親に名護市役所内でこのようなサポートが整っていることを伝え、安心して子育てができるように支援したいとの意見が聞かれた。病院施設での実習と地域での実習を通して地域での母児を支援する保健師の役割を具体的に知る事が出来たと思われる。</p> <p>いかにリスクのある母児にアプローチしていくか、沖縄に嫁いできた沖縄の文化、風習をしらない母親に対してのサポート状況などの報告を通して現在の問題や課題についてディスカッションをする事が出来た。現在乳児健診にボランティアで参加しているため、今後とも風通しの良い関係を構築していく必要があると思われる。</p>				
今後の取組み(本企画について、今後どのように発展するかを具体的に記入してください。)				
<p>・研究会を通しコメディカルの連携が円滑に出来るようなパイプ役を担っていくためには、今回看護師や助産師の出席がみられなかったため、近隣の産科施設や実習施設などに声かけを行い、資質向上の勉強会としての企画となるようにしていく必要がある。</p>				

第4回

申請者氏名（代表者） 小西清美		所属部門	人間健康学部看護学科 母性看護学領域		
企画名 沖縄母性看護研究会：第4回 私の行う性教育 講師：長嶺 絵里子					
企画の目的・概要（企画の目的と概要を正確かつ簡潔に説明して下さい。） 企画の目的としては、妊産褥婦にかかわる助産師、保健師、看護師や専門職者が母性看護に関連するテーマでディスカッションを行い、情報交換の場とする。さらにケアに関わるコメディカルの知識の洞察、意識づけに関与し、助産ケアに還元すること。 小学校、中学校で行っている助産師の視点から見た性教育活動の取り組みの詳細についての報告（性の多様性、性感染症、性行動の賢明な選択、性の自己受容）がされた。性教育の具体的課題について情報交換がされた。					
企画実施組織（代表者、分担者及び協力者） （小西 清美 鶴巻 陽子）					
氏名	所属・職名	現在の専門	役割分担	備考	
小西 清美	人間健康学部教授	母性看護領域	司会・進行		
金城 壽子	人間健康学部准教授	//	受付		
鶴巻 陽子	人間健康学部助教	//	会場設営 資料準備		
企画実施報告(参加人数等を明記)					
実施した日時：平成 25 年 12 月 19（木） 18:30～20:30 ・参加人数 16 名 内訳 看護学生 10 名 助産師 1 名 他 1 名 他 1 名 市役所職員 2 名 教員 2 名					
企画の実施評価(ケアの質の向上、または大学および地域の貢献)					
<ul style="list-style-type: none"> 参加者の反応は性教育の内容に「対象の小、中学生に自己肯定感の内容が盛り込まれていることに感心した」「性教育は個人差もあり難しいと感じているが、個人に語りかける方法や親のメッセージを伝える方法は心に響くと思う」「性教育の必要性の方法や必要性が具体的に知る事が出来て勉強になった」とのコメントがあった。「将来養護教諭になることが夢なので、今回学校での性教育についてきき事が出来て勉強になった」「性は内容が深くもっと勉強したいと思った。一緒に参加したい」「自分自身について見つめなおすことが出来た」との良好な反応を得る事が出来た。多くは学生からのコメントであったが、次世代を担う思春期における性教育の必要性が認識できたと思われる。また沖縄の現状（エイズについて・性への学内での課題）を知ることは今後学生達の性教育への動機付けになりさらに母性看護のリプロダクティブヘルスを理解し、今後のヘルスケアを考える機会になると思われる。 					
今後の取組み(本企画について、今後どのように発展するかを具体的に記入してください。)					
<ul style="list-style-type: none"> 外部の参加者が少なかったため、近隣の産科、母性に関わる領域に声かけを引き続き行っていく必要がある。また、声かけの方法や参加しやすい時間帯を検討していく必要もあるが、遠方からは来ることが容易ではないため、インターネット上で参加するなどの方法も今後検討していく。 今回も学生が多数であったが講義終了後も講師に質問をしており学生の反響が大きかった。当大学は養護教諭、保健師の資格が習得できるため、小、中学校の養護教諭に働きかけ参加していくことで性教育を多角的にとらえ、情報の共有が図れる場の提供ともなりうると思う。 次年度も継続して企画をしていく。 					